

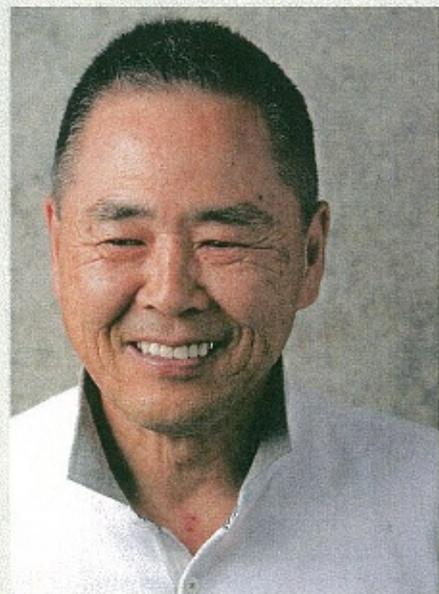
「和が家」のスタッフたち。採用条件は、「ハートのある人」と生方さん(左前)、22歳の石川祐一さん(左奥)は「ありがとう」と言ってもらえるとうれしい」



生きていければ同年だったはずの
実母の面影と重なるところがある。
「父も小学校6年で亡くした私は、
そうしたくても世話をする老いた親
がいません。和が家はみんなのおう
ちです。この仕事に幸せを感じてい
ます」
医療主体でなく
暮らしを優先する
「和が家」の誕生
正式名称は、「NPO法人在宅福

祉たらつべ会石倉ホーム和が家」。山
野に自生する「たらのぎ」を、群馬の
方言でたらつべと呼ぶらしい。
03年6月に開設した「和が家」の
立役者は、痛み専門のクリニック兼
緩和ケア診療所「いっぽ」群馬県高崎
市院長の小笠原一夫医師である。小
笠原は47年生まれ。慶應義塾大学経
済学部を出てから医者を目指し、群馬
大学医学部卒。「いっぽ」の前身であ
るペインクリニック小笠原医院を91
年に開設して早19年、わが国におけ
る在宅ホスピスの草分けとして知ら
れる。小笠原は、「和が家」の誕生秘
話を、こう明かす。
「在宅ホスピスとして僕が住診して
いたがん末期の患者さんに、この大
家さんの妹さんに当たる方がいた。
その人は幼いころにこの家で育った
んです。そんな御縁があって、7年
前に解体寸前だったこの家を「好き
なように使ってください」と言って
くださったことが、医療主体ではな
く、暮らしを優先する和が家の出発
点になったんです」
この世は縁ですと語った小笠原
は、医療哲学も実に明快である。そ
れは、自分がその立場になった時に、
これは嫌だと思ふことを絶対にしな
い、ということだ。逆に、自分がそう
なった時はどうしてほしいか、どう
したいか。想像すると、終の棲家の
条件と相通じるものがあった。

そうした経緯も
あって、がん末期
で終の棲家に「和
が家」を選ぶ人も
多く、前出・生方
さんは「私が看取
った方は16人で
す」といった。
その一人、85歳
男性は膀胱の末
期がんだった。在
宅ホスピスで息子夫妻が介護に疲れ
た時点でこちらへ移り、その12日後
に亡くなった。また肺がんの76歳男
性は、息子夫妻と同居し、娘が1人
いた。病状が進行して在宅困難とな
った時に、やはり、「和が家」にやっ
て来た。この男性は25日間を過ごし、
永眠。
今年1月7日に入所した66歳男
性は胃がん末期。42日後に亡くなる
まで、家族や会社の元同僚、友人ら
が足繁く通ってきた。2階の個室に
は見舞いの花が絶えなかつたという。
「この方は石原裕次郎の歌が好きで、
CDをかけ一緒に歌ったりしました。
亡くなった夜は、幼馴染みで同級生
のお友達と同じ部屋に泊まり、「俺
はお前のそばにいるよ」と付き添っ
たんです」(生方さん)
がん末期の痛みケアは「いっぽ」
が引き受け、入居期間は最短2日
最長288日。最後に、小笠原はこ



小笠原一夫医師のポリシーは「患者が主役」。最近一年間の在宅ホスピスの患者数は延べ684人。「いっぽ」チーム(医師2人、ナース9人)が協力し、「和が家」はがん末期患者も受け入れる

ういった。
「医者の僕が驚くのは、和が家のパ
ワーです。在宅ホスピスで僕らがギ
ブアップ寸前の人でもここに来ると、
スタッフは医療行為なんか何もしな
いのに、穏やかな顔になり、いつの
間にかニコニコ笑っている。人は最
期に何を望むかと言えば、立派な病
院ではなく、ハートのある人が寄り
添って世話をし、安心して看取って
くれる場なんです」
午後6時過ぎ。夕暮れ迫る風の中
にツクツクボウシの鳴く声が響いて
いた。私は、「和が家」全体を門の外
からゆつくり眺めてみた。巨大な家
である。100年の風雪に耐えてき
た家である。ひと昔前まで裕福な一
族が大家族で暮らした旧い家屋には、
文化遺産的な風格が漂っていた。そ
うした「和が家」の懐かしいぬくも
りに抱かれて、大往生へと誘われる。
これも悪くないと思った。